

高山の文化を高めた人々

77

戦後飛驒の美術を牽引した 洋画家 沖野 清

上屋美千弘



沖野清(昭和41年頃)

沖野清は昭和三年、神岡町朝浦に生まれる。昭和十三年、父親の仕事の事情により北朝鮮・公立新廷小学校に転校、その後、高山市第二小学校、斐太中学校を経て岐阜師範学校男子部本科に入学している。

沖野の生涯は、自らの画業を絶えず革新し、飛驒の美術を牽引し続ける模索と苦闘の日々ともいえる。特に師範学校入学から第二中赴任、昭和二十七年の岐阜大学美術研究室での研修、そして帰郷まで

の約七年間は、画家・沖野の生涯を方向づける疾風怒濤の時代であった。

その一つは、在学中、坂井範一に学んだことである。坂井は戦後の美術界の変動の中で、官展を離れ、対象の描写的再現から絵画を解放し、造形そのものを主調にした画面を創り続けた画家である。沖野は坂井に出会い、当時、反日展系であった新制作派展の入選をめざし、抽象的な画面を創り続けることになる。

二つめは、当時の東京で美術団体連合展を観たり、また、泰西名画展にふれた

りするなど、ピカソやマチスの西欧絵画をはじめ、猪熊弦一郎ら新制作展の画家が生み出す新しい絵画の激流に出会い、画業を深めていることである。沖野は自著で「私は(焼け跡の残る中) 展覧会を見てはしきりに興奮するばかり…」と述べている。

三つめは、戦後の昭和二十七年より、大阪から高山に疎開し画塾を開いていた天才女流画家とも称された徳永富士子の後を受け、神通寺で子どもや大人を対象に絵を指導していることである。沖野

にとつて、飛驒の子らを描いた才気あふれる徳永の絵は、鮮烈であつただろう。当時、高山の宇野英太郎氏、田中一翁氏らが沖野を推薦したことが知られている。

短い年月でのこれらの経験、出会いは、以後、六十年



「黄色い貨車」

また「わらにゆう」、「飛驒の匠」、「野麦峠」を主題にした連作など、沖野が試みた表現は多様であり、またその清冽な表現は、それぞれ観る者に訴える力を持つ。

沖野は美術の指導者としても卓越していた。昭和五十年、高山市勤労青少年ホームの絵画クラブと飛驒地域の小中学校の教師らに呼びかけ、ひだクリエイト協会を発足し、平成二十八年に、亡くなるまで、毎年、会員の発表の場として協会展を開催し続けていた。この会を通して、油彩画、彫

あまりに亘って歩んだ沖野の画業、飛驒での美術の啓発、また後進の育成の強いスプリングボードとなった。

沖野はその後、どのように歩んだのか。瞠目すべきは、高山でイサム・ノグチ、守洞春らと出会ったり、松本竣介、A・ワイエスなどの表現に刺激を受けたりするなどして、一つのスタイルにとどまらず、絶えず自らの表現を乗り越え、革新するようにして画業を深めてきたことである。初期のキュビズム風の絵画、新制作での抽象画の連作、

刻、版画等の分野で多くの地域の作家が育っている。紙面の都合上、木版画指導者としての業績にはふれられないが、市展、油彩画教室等の指導者としての実績も含めて、飛驒の美術文化を広め、高めた沖野清のことは、ずっと記憶にとどめておきたい。



ひだクリエイト協会小品展